

氏名	くらしま あきら 倉島 哲
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博第302号
学位授与の日付	平成16年11月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	文学研究科行動文化学専攻
学位論文題目	身体技法と社会学的認識

論文調査委員 (主査) 教授 寶月 誠 教授 松田 素二 教授 落合 恵美子

論文内容の要旨

社会学が長年取り組んできた社会構造の科学的認識と当事者の主観的意味の両立可能性の問題、いわゆる「構造と主体」あるいは「客観主義と主観主義」の問題を解決するうえで有望なアプローチとして、実践への関心が高まっている。だが、実践を捉えることは困難をきわめ、いまだ決定的なアプローチは提出されていない。本稿は、身体技法の有効性という観点から実践にアプローチすることで、実践をめぐる理論的状况に一石を投じることを試みる。

従来、身体技法とは、価値・規範・制度などの社会的な枠組みが、行為者の無意識のうちに身体化された産物と考えられてきた。そのため、身体技法の概念はもっぱら、社会的に決定された身体、あるいは、社会的再生産の媒体としての身体を表象するために用いられることになった。こうして、身体技法は客観主義の陣営に回収されてしまった。

だが、いかなる身体技法といえども、それが形成されるのは個々の行為者の具体的な実践をおいてない。同様に、身体技法が働きかけるのも、実践における具体的な人や物をおいてないはずである。このような具体的な実践に対する視点が失われ、価値・規範・制度などの抽象的構造との関係だけが強調されたためにこそ、身体技法は社会的再生産の媒体としての地位におとしめられてしまったのではないだろうか。

本稿は、京都市に所在する武術教室 S 流における技の習得過程を検討することで、具体的な実践において身体技法がどのように形成され、また、どのような効果を発揮するかを明らかにする。その結果、身体技法とは、社会的な枠組みもとで習得されつつも、この枠組みに依存しない有効性をもつため、かえってこれを変化させうることが示される。こうして本稿は、実践における身体技法への着目というアプローチによって、従来は実践を外的に拘束するものとのみ見なされてきた客観的構造が相対化されることを指摘する。

S 流における技を捉えるための視点は、直接的には、マルセル・モースの論文「身体技法論」を読解することで導き出される。だが、社会学・人類学における通説にしたがえば、この読解は屋上屋を架すごとき作業に見えるはずである。なぜなら、通説では、「身体技法論」は着想こそすぐれているものの、すでにピエール・ブルデューをはじめとする身体的実践の理論家によって乗り越えられた、過去のものとされているためである。そのため、身体的実践を表象するための理論がすでに数多く存在するなか、あえて過去の論文を取り上げ、これに新奇な解釈を施す必然性はどこにあるのか、という疑問が本稿に対して投げかけられるのを避けられない。

このような疑問に答えるために、「身体技法論」の検討は理論編の最終章で行うことにし、それに先立つ各章で身体的実践をめぐる四つのパラダイムを検討しておきたい。検討するのは、ピエール・ブルデューの実践理論、ハロルド・ガーフィンケルのエスノメソドロジー、ジーン・レイヴとエティエンヌ・ウェンガーの状況的学習論、そして、マイケル・ボラニーの暗黙知理論である。

検討したパラダイムがいずれも S 流の技の有効性を十分に表象できないことが示されたのち、理論編の最終章では、いよいよ「身体技法論」の読解を行う。それによって導き出されるのは、技の有効性を表象するために最適な視点としての、

相互身体的視点である。しかし、この読解からは、相互身体的視点が経験的に実行可能になるための条件は十分に明らかにはされないため、この課題は実証編に持ち越されることになる。

実証編では、私が1999年5月より2003年10月まで行ってきたフィールドワークにもとづき、武術教室S流を考察する。それによって、相互身体的視点の可能性の条件が解明される。また、この条件を満足することで、具体的にどのような技の有効性の表象が可能になったかが示される。最後に、S流の技の有効性を表象するための方法を、他の技の有効性を表象することに適用する可能性が検討される。

以下、本稿の構成を各章ごとに要約したい。本稿は、理論編（全4章）と実証編（全7章）の二部構成をとり、最後に全体の結論が提示される。

理論編1章「ブルデューにおける実践」では、現代フランスの社会学者ピエール・ブルデューのハビトゥス概念が技の有効性を表象しているかを検討する。ブルデューは、構造決定論を克服するために実践に着目し、実践する身体をハビトゥスとして概念化する。ハビトゥスは無意識のうちに習得された身体技法であるとされるため、一見してこの概念によって技の有効性を表象しうるかに見える。だが、彼のいう実践とは、行為者が無意識下に資本を追及する行為であり、このような実践を生成する原理がハビトゥスである。ハビトゥスは資本によって特徴づけられている限り、有効性の欠如した、恣意的な存在として表象されるほかないのである。

2章「エスノメソドロジーにおける実践」では、現代アメリカの社会学者ハロルド・ガーフィンケルの提唱するエスノメソドロジーが検討される。ブルデューはエスノメソドロジーの理論的立場を自分の立場と相容れないものとして批判しているため、一般的な社会学の理論的文脈では、両者の方法論的内的連関が指摘されることは少ない。だが、社会学の方法論や先行研究など、客観的認識を可能にするあらゆる枠組みを離れて実践そのものに迫ろうとするエスノメソドロジーの関心は、ブルデューの関心ときわめて近いといえる。エスノメソドロジーの方法は実践にひたすら内在することであるため、技の有効性を表象できるかに見える。しかし、この方法は実践が静態的な意味の網目で覆われているという誤った前提に立っているため、技の有効性を表象できないのである。

3章「わざ言語」と実践」では、技の教授と習得という実践を主題化した、教育学者の生田久美子のわざ理論と、人類学者のジーン・レイヴとエティエンヌ・ウェンガーの正統的周辺参加論が検討される。これらの理論家は、カリキュラムや時間割などの様々な客観的な構造が学習のあり方を決定しているという、近代学校教育に特徴的な学習観を乗り越えようとした。この点で、これらの理論家にはブルデューとガーフィンケルに共通した、実践そのものへの関心を認めることができる。だが、本稿の検討によって、生田とレイヴらは、客観的なカリキュラムなどの構造を克服したものの、共同体の意味という別の構造を実践に読み込んでしまったことが示される。考察の過程で、実践に読み込まれる共同体の意味がいかに恣意的にしか措定されえないかを示すために、科学哲学者マイケル・ポラニーの暗黙知理論が批判的に検討される。

3章では、技の習得における「わざ言語」の役割の解明も目指されている。わざ言語とは生田の造語であり、技法の指導に際して用いられる比喩的言語を指す。S流ではわざ言語が頻繁に使用されるため、その役割が解明されることは、S流の技の有効性を表象するうえで役立つはずである。だが、生田は、わざ言語の重要性を指摘しながらも、観察者によって読み込まれた構造の内面化の過程にこれを回収してしまうため、その役割を解明できなかった。本章では最後に、哲学者ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタインの言語ゲーム論に依拠して、わざ言語が、日常的な動作における有効性を技における有効性に変換することで技の習得を促すという視点を示した。だが、この視点は、わざ言語の原理的な役割を解明しているものの、特定のわざ言語によって具体的にどのような変換が行われるかは表象できないのである。

4章「身体技法としての実践」では、フランスの社会学者・人類学者であるマルセル・モースの身体技法論が検討される。モースの身体技法論は、一般的には、ブルデューの実践理論によって批判的に継承され、すでに過去のものになったと考えられている。だが本稿は、この身体技法論に独自の読解を施すことで、モースが暗黙のうちに依拠していたはずの相互身体的視点を体系的に提示し、これが技の有効性を表象することに成功していることを示す。これは、従来いかなる社会学者・人類学者によっても行われることのなかった、本稿のオリジナルな読解である。

相互身体的視点とは、モースが自分にかわって技の有効性を享受するにふさわしい資格を行為者に与えることで獲得したものである。この視点は、モースが技についての土着の主観的表象を集めることで構築したものである点で、主観的視点

とは区別される。また、客観的視点とは異なり、どの行為者に技の有効性を享受する資格を与えるかに応じて柔軟に変化するため、それぞれの技の有効性をもっとも適切に表現することができる。このような視点に立っていたからこそ、モースは身体技法を有効な行為として表象することができたのである。

だが、「身体技法論」からは、観察者が、行為者に技の有効性を享受する資格を与えることが、どのような条件のもとで可能であるかを知ることはできない。この条件の解明は実証編に持ち越される。

実証編では、理論編で提出された相互身体的視点の可能性の条件を探求する。その方法として、この視点を武術教室 S 流の考察に試験的に適用する。

1 章「S 流との出会い」では、S 流というフィールドを選択するまでのいきさつと、S 流の位置づけられた社会的文脈が説明される。S 流の内部の考察に立ち入るまでもなく、予備的説明からしてすでに相互身体的観点が不可欠であることが示される。

2 章「S 流の諸活動」では、S 流の年間の主要な活動が記述される。これは、次章以下で検討する土曜日と火曜日の練習が位置づけられている文脈として重要である。

3 章「土曜日の練習」では、典型的な土曜日の練習内容が詳細に記述される。これは、次章における太極拳の型の詳細な検討のための準備である。

4 章「太極拳における有効性の微分」では、太極拳の型の有効性が相互身体的視点に立って記述される。名目上は同一の型であっても、私とその型から享受する有効性は変化してきた。すなわち、漠然としたひとつの有効性が、複数のより具体的に明瞭な有効性へと微分してきたのである。それに応じて、型を適切に表象するための視点も変化してゆくが、この過程は、私的に完結するものではなく、S 流の指導者や他の会員に開かれている。すなわち、新しい有効性が享受できるようになることで、指導者や他の会員も同じ有効性を享受できているか否かがわかるようになったのである。したがって、観察者が、自分にかわって特定の行為の有効性を享受するにふさわしい存在としての資格を行為者に与えるための条件とは、観察者自身がその技に同じ有効性を享受できるようになることである、という仮説が成り立つ。

5 章「火曜日の練習」では、典型的な火曜日の練習内容が詳細に記述される。これは、次章における杖術の型の詳細な検討のための準備である。

6 章「杖術における有効性の微分」では、杖術の型の有効性が相互身体的視点に立って記述される。これは、太極拳の型において認められたのと同様の有効性の微分が、杖術の型においても認められることを明らかにするものである。

7 章「客観的構造の有効性の微分」では、技の有効性の微分に伴って、S 流の諸制度も微分されてゆく様子が記述される。太極拳と杖術の区分・S 流と他流の区分・理論と実践の区分は、客観的視点のもとでは実践を外部から拘束する区分として認識されてしまうが、相互身体的視点のもとでは、実践における技の有効性の微分に相即してその有効性が微分される区分として認識されるのである。

「結論」では、相互身体的視点の意義が確認されるとともに、この視点の一般化可能性が検討される。モース「身体技法論」が、狭義の技のみならず、社会的実践すべてを捉えるための視点を提供したように、相互身体的視点も、S 流の考察に限られない一般性を持っていると思われる。つまり、私が S 流で行ったような、一見して同じに見える技に微分的な有効性を認め、それが技をめぐる客観的構造の有効性を微分させる過程の記述を、他の社会領域でも行うことはおそらく可能だろう。そのためには、観察者みずからが行為者の実践に参加し、その技を習得しつつも、技の有効性と、技をめぐる様々な客観的構造の意味が、想像だにできない仕方で微分することに対してつねに敏感であることが有効なはずである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、武術教室における技の学習を題材にして、身体論、身体技法論の分野に新たな理論的視座を導入しようとする刺激にみちた論考である。

近代社会学が誕生して以降、社会と個人、構造と主体という問題構成は、つねに社会学的議論の中心を占めてきた。本研究は、この基本問題に対して、身体技法の有効性という独自のアプローチによって、貢献した点で、きわめて優れた論考であると認めることができる。また方法として採用した、武術教室への参与観察は、四年数ヶ月にもわたる長期かつ徹底した

ものであり、その点でも従来の身体技法の社会学的研究のレベルを超えている。

本論文の優れた特徴については、以下の三点に要約できる。

第一の特徴は、その理論的視座に関わるものである。社会学における身体技法研究は、1930年代のマルセル・モースの研究に端を発する。しかしながらその後、モースの研究は、等閑視され、代わって、ブルデュー、ガーフィンケル、レイヴとウェンガーなどによる研究が支配的なパラダイムとして脚光をあびるようになった。本研究は、まずこれらの理論的枠組を、原典に忠実に依拠しながら批判的に検討し、それらのモデルの限界を明らかにする。ブルデューの実践理論の批判については、まず、その中心概念であるハビトゥスを、多くの社会学者が無批判に用いている点を指摘する。そのうえで、構造と主体を媒介するとして提出されたこのブラックボックス化された概念が、じつは構造を深く刻印した非媒介的なものである点を明らかにし批判する。

また身体論の社会学的研究において多くの支持者を得ているエスノメソドロジ的視座についても、エスノ論者が採用する「実践の自明性」という大前提が、身体技法研究においては有効ではないことを理論的に提示することで批判した。とりわけ昨年公開されたガーフィンケルの最新の著作が内包する問題点を鋭く指摘し、エスノ的身体理解の理論的限界をいち早く明らかにするなど、内在的で生産的な批判の論点は、エスノ論者からも評価されている。身体技法をとらえるさい、社会学的研究においては、「わざ言語」・「暗黙知」という概念は、なかば普通名詞化しており、多くの研究者によって無批判に用いられているが、倉島氏は、これを本来の理論的文脈のなかに位置づけて検討し、その問題点を的確に指摘している。またこれに関連して本研究は、わざ言語論者が依拠するワイトゲンシュタインの言語ゲーム論にも言及する。わざ言語の有効性を解明するにあたり、言語ゲーム論に基礎付けられた「有効性の変換」というユニークな視点をいったん樹立しそれを評価しつつも、経験的な事例分析においては有効性を持たないとしてこれを斥ける。こうして本研究は、身体論を社会哲学的領域から、再度、経験科学の領域へと再定位することを表明するのである。

倉島氏の研究の第二の特徴は、モースの身体技法論を再評価し、その理論的核心として、相互身体性 (intercorporeality) をより洗練された形で提示した点である。

倉島氏のモースの「身体技法論」の読解は、「身体技法論」におけるモースが暗黙的に依拠していたはずの方法を再構成するという、いささか冒険的で挑戦的な方法を採用している点で、きわめてユニークなものである。そこから導き出される「相互身体的視点」の再評価は、これからさらに理論的に精密化される余地はあるものの、きわめて日常的かつ常識的な発想・思考・認識の様式に対して、このように明快な理論的表現が与えられたことは注目すべきである。この「相互身体的視点」は、観察者と行為者という、既存の社会学的視点では解決しがたい非対称な関係性を理論的実証的に超克する点でとくすぐれている。フィールドにおける調査者の権力性が問題化されている状況にあって、この視点はきわめて有望である。社会学、人類学における身体論研究の第一人者である、カリフォルニア大学サンディエゴ校のショーダッシュ教授は、身体論の基礎を、主体性から間主観性、そしてさらに相互身体性へと展開していくことを主張している。倉島氏は国際シンポジウムでショーダッシュ教授と同じセッションの報告者として議論を展開し、その独特の相互身体性の概念は、教授も含む参加者から高く評価された。

倉島論文の第三の特徴は、長期の参与観察にもとづく膨大なデータを駆使して、先述した相互身体的視点から「技の有効性」を記述するという方法にある。なかでも、一見して同じに見える型や技が、練習のなかで多様な姿として現象することを、技の「有効性の微分」現象ととらえ詳細に考察した点は、本論文のもっとも刺激的なデータ分析である。武術の実践において感覚された技の多様な側面は、理論編で導かれた相互身体的視点によって、豊かな実証分析として結実したといえる。

倉島氏の論文は、社会的な意味やアイデンティティに関する微細な分析が主流を占める現在の社会学の思潮において、社会的な意味を逃れつつも新たな意味を生み出す身体技法、とりわけ武術の技に着目した点で、独自の研究領域を切り開いているといえる。

しかしながら、ところによって独りよがりな論理を積み重ね、説得力を減じている箇所も散見される。また内在的批判を志向しながらも、理論的整理のさい、あまりにも単純化した論点で、既成理論を批判する傾向も見受けられる。さらに言語化することが困難な側面をもつ相互身体性を、論理的に整理する手続きが十分でないなど、いくつか課題が残されている。しかしながら、これらの問題点を考慮しても、倉島氏の意欲的で挑戦的な研究姿勢とそれにもとづいて完成された本論文の

優れた意義が損なわれることはない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2004年10月14日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。